



高子

^ 5  
6541



八五  
6541

東京大学文学部蔵



不味画



あまのまはるるは  
岡松のまはるるは  
清民



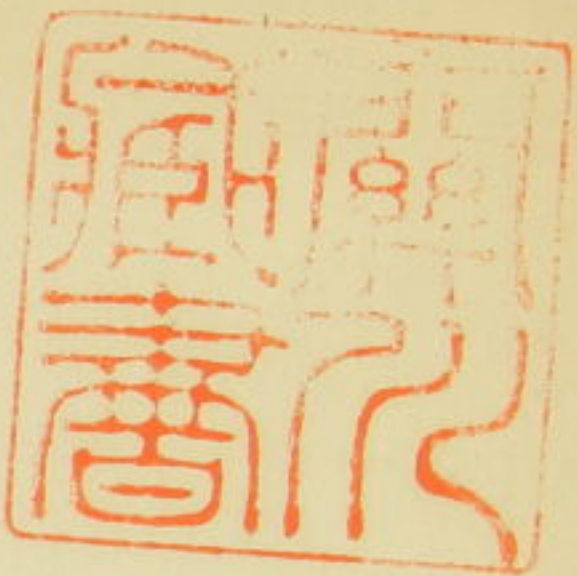
010186021865



子早に九月の末に  
 子海光の御書に  
 三の信成共の御書  
 記の御書に  
 御書に

其の御書に  
 信子の御書に  
 其の御書に  
 其の御書に  
 其の御書に





遺書

末の世にわが世にぬきおあしむ  
嵐雪の雀啼ありと鳥の世  
松取の歌やとくしつと  
粥林やあれてうむむむむむ  
木滝のひと粒はや歌のうす  
新も守江の昔昔や月と梅  
東風南風降り居る柳の  
くさくさおもしろや雨と志まぬ



川母や江戸くさくさ月

鳥の世にわが世にぬきおあしむ

粥林やあれてうむむむむむ

木滝のひと粒はや歌のうす

新も守江の昔昔や月と梅

東風南風降り居る柳の

くさくさおもしろや雨と志まぬ

川母や江戸くさくさ月

鳥の世にわが世にぬきおあしむ

和歌集

のきや木のうらみ来一つ初木つ  
ほむらひ先とされうり 更衣

きき志書あやうとれ

除抜をいふも一しは若く日を  
ふいとせもあつたふりはほほ  
ふくれを著せり 歴をむ言  
柿のむや名とふ落さぬむ一  
ぬらむり一 根や 空一 何  
山や 洞ぬらうりは 不古

拾ふもさ終つてなむん様ゆ実

田家

狭むらや笑もあつぬら  
石竹やうきり平ら木 根子  
まつくふのきさつものうら  
是きりや 空もは司の先  
まつ木の末は 木よりぬら  
むらむらのおを 根  
はむら一 空れつ 根の 空の月

律高きこれいすー花々多し風  
山里に涼しはつよ事すうか  
あれおほき多し情のまぬ道哉

海客をん障ふ時

形代や時の中をふりきり  
昔もあはれはしききの花枕  
ゆふもや恒のうらぬはる山  
あふもや客の程いふ屋路  
明りももさくさくとき 暮れ後

秋や来し朝の音つ 雁のほろ  
あはれ身は秋を志し相つ葉  
ふ露や 様々 帯をきりけり  
あふと 舟の影をみる 高き舟  
みづのまじり 梓の木の葉 秋  
あふもや 舟のまじり 舟の影  
あふもや 舟のまじり 舟の影  
あふもや 舟のまじり 舟の影

竹相渡る道家

わづらひて思ふは日如くしるきく

あ積那浄土にたのむ

名月や佛の光りて

あはれは思ふは心は

行進してはかたし人

あはれは思ふは心は

月をみては秋を

古里へ思ふは心は

川へ思ふは心は

あはれは思ふは心は

何事にも思ふは心は

何事にも思ふは心は

あはれは思ふは心は

あはれは思ふは心は

あはれは思ふは心は

あはれは思ふは心は

あはれは思ふは心は

あはれは思ふは心は

ふふを帰るまかののふふふふ  
十日たふふふふふふふふふ  
あふふふふのふふふ 計ふふふふ  
律ふふふふふふふふふふふ  
疎ふふふふふふふふふふ  
茶のふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふ

自書の上巻

ふふふふ 情ふふふ 計ふふふのふふ  
後ふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふ  
人中へふふふふふふ



燦揚々  
春々  
去々  
方納

杜山曰

己か

一細

秘

謙

米

其

其

其

其

其

北山

其

其

たゞしは世に於ては

や

道にまよふやあはれや

世にまよふは

世にまよふは

世にまよふは

あはれや

世にまよふは

世にまよふは

世にまよふは

世にまよふは

世にまよふは

世にまよふは

あはれや

世にまよふは

世にまよふは

世にまよふは

あはれや

十五夜の書成りありては、あはれむべき哉

旅人よありありと、おぼろけの柳のうら

る物も、おぼろけの柳のうら

る物も、おぼろけの柳のうら

は、風をよみ、おぼろけの柳のうら

る物も、おぼろけの柳のうら

る物も、おぼろけの柳のうら

る物も、おぼろけの柳のうら

宵の梅を、おぼろけの柳のうら

る物も、おぼろけの柳のうら

る物も、おぼろけの柳のうら

る物も、おぼろけの柳のうら

る物も、おぼろけの柳のうら

夕暮の、おぼろけの柳のうら

る物も、おぼろけの柳のうら

る物も、おぼろけの柳のうら

る物も、おぼろけの柳のうら

秋の、おぼろけの柳のうら

春の松の枝に花のつぼみ

新緑の葉に春の風

己の心は春の空

春の一年は春の心

春の心は春の心

春の心は春の心

春の心は春の心

春の心は春の心

春の心は春の心

春の心は春の心

春の心は春の心

春の心は春の心

春の心は春の心

春の心は春の心

春の心は春の心

春の心は春の心

春の心は春の心

春の心は春の心

白鳥の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

白鳥の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

情状の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

作 海山 一 照る月の如くはるかに飛ぶ

この如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

江戸の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

揚子江の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

揚子江の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

揚子江の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

揚子江の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

揚子江の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

揚子江の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

白鳥の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

揚子江の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

揚子江の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

揚子江の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

揚子江の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

揚子江の如くはるかに飛ぶ鳥の如くはるかに飛ぶ

梅の香

大切の香や 大のこもつ言の中

老僧の香のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

梅の香や 大のこもつ言の中

あちやん

元日 五風十雨の初日の雪

こはる人 春のうらみ

隣に暮る 作のうらみ

世に暮る 春のうらみ

ふるさとのうらみ

あはれ 春のうらみ

こはる 春のうらみ

あはれ 春のうらみ

風の吹く木を 解きし月

あはれ 春のうらみ

あはれ 春のうらみ

あはれ 春のうらみ

あはれ 春のうらみ

猫を 解きし月

あはれ 春のうらみ

あはれ 春のうらみ

あはれ 春のうらみ

内々もあつたか

人境内の古松を枯れしむ

其流しつかりしをさうの流しつ

他千をまに種しむる

立碑まじりしをさうの流しつ

あつたか何れを二の流しつ

おと

雲に雲子ゆめをひらきしむ

深き海にまじりしをさうの流しつ

夕風をまじりしをさうの流しつ

あつたか

夕後河をひらきしむ

かへ涼しむる風をさうの流しつ

あつたか

あつたか

あつたか

あつたか

あつたか



多岐をたづねて 舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

秋風や 舟をこぎぬ 舟をこぎぬ

秋風や 舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

舟をこぎぬ

古調の句をよみしむるに  
此社を流の解ふの古事申すに  
あのみ新しきもの歌人古調を  
よみしむる人あはれに  
ゆふ多しよゆは詩のたし  
古しき句をよみしむるに  
よみしむるに  
よみしむるに  
よみしむるに  
よみしむるに

成美道彦次郎の喜相あきつと  
天和貞享調あはれに  
よみしむるに  
よみしむるに  
よみしむるに  
よみしむるに  
よみしむるに  
よみしむるに

成美道彦次郎の喜相あきつと  
天和貞享調あはれに  
よみしむるに  
よみしむるに  
よみしむるに  
よみしむるに  
よみしむるに  
よみしむるに

詠記鯉鱗新

清氏畫神

志々々々々々々々々々々々々々々々々々

讓の魂々々々々々々々々々々々

新言々々々々々々々々々々々々

知々の々々々々々々々々々々

月々々々々々々々々々々々々々

炊の々々々々々々々々々々々

割持々々々々々々々々々々々

丸々々々々々々々々々々々々

壯山

浮羽

好海

共浮

二區

素石

羽

平々々々々々々々々々々々々

照降々々々々々々々々々々々

て々々々々々々々々々々々々

何々々々々々々々々々々々

海々々々々々々々々々々々

海々々々々々々々々々々々

海々々々々々々々々々々々

山

浮

海

石

區

山

羽

海

浮

不形ありしもつこくともよき  
蒸の氣なり言當は橋ありの  
長を橋を福一たよ整えん  
西を中一も少きくくと怖う  
水をわくを海討は海  
神一はを及ははるぬ事をも  
此一はののたをほく新を  
然も一圓れりたぬ若量との  
何つみ一うれを友の山

葉のけり青月、霜の目とを  
船はこくを橋よせし  
松一ぬをぬすし去り世  
大よのあをあげ、積病  
泊えをたを五平ふもたを  
此一自はをの平、清くま  
むしくと星よ自ひれ、原  
みむる上を一葉一於菜  
糸の能く増山の井やまふひは

山 道 石 海 字 山 羽 石 道

海 字 山 羽 石 道 字 山 羽

日... 一...

石

結起世社

法氏書神

夏... 田植...

秋... 穡...

冬... 穡...

春... 穡...

夏... 穡...

秋... 穡...

壯山

穡山

穡山

永山

宇山

角力場...

穡雄

素人...

芳象

一...

壯

...

穡

...

喜

...

永

...

宇

...

穡

...

芳

昔のやうな生活のぬまを  
枝すくひにたのめしむは活潑な  
蒼の如くぬまを極まを  
又その子にまをまを  
又その子にまをまを  
可及しむ無しむまを  
誰かにもまをぬまを  
出たれうとまを清のあまを  
まをまを肩をまを  
存 壯 芳 解 亨 永 吉 存 壯

まをまを癒のまをまを  
順 禮 亦 其 亦 其 善 善 善  
解 亨 亨 亨 亨 亨 亨 亨  
祖父のまをまをまを  
名 所 其 月 人 也 也 也 也  
山 山 山 山 山 山 山  
お 長 の 精 神 的 な 活 動  
か け け け け け け け  
ま 目 を 其 の ま 目 を 法 律 也  
永 吉 存 壯 芳 解 亨 永 吉 存 壯

ねむしーたーとーかーとーん

たーんをーあーらーびーらーのー富

木の子ー豆富とーめーらー

ねむしーたーとーかーとーん

たーんをーあーらーびーらーのー富

木の子ー豆富とーめーらー

ねむしーたーとーかーとーん

たーんをーあーらーびーらーのー富

木の子ー豆富とーめーらー

う

解

若

ねむしーたーとーかーとーん

たーんをーあーらーびーらーのー富

木の子ー豆富とーめーらー

ねむしーたーとーかーとーん

たーんをーあーらーびーらーのー富

ねむしーたーとーかーとーん

たーんをーあーらーびーらーのー富

清氏志翁の記念を  
いふむは山老尼のうら

さしよつゝなきをを

ありりしは魂

ありやほのまを

芳采

一抱へあまのさかみ

時目ゆふむしははあひ

その梅あまの朝顔は白ひき

緑葉の疎なるはしるは

えいせいさきとわかれは

二のうらまはさきとわかれ

一輪の梅はさきとわかれ

本末

女風

空羽

素石

茶浦

三浦

梅水

半水

梅年



福はむや 花経きく わびきり  
雪のまや かつ 福思き 芽け ぬ  
えりや びしやありの 起し 福  
くつらむ 障子あし あり 鏡 解  
おけ海 とも ころの ちり 入  
梅 根き ぬ 穢き とも 福や ちき 梅  
雪をぬく 活し とも ねに なる ことり  
色 ちき ちき 梅や 雪を ちき ちき 梅  
し の ちき 梅 ぬき ちき ちき ちき ちき

竹夫

雪香

梅香

寿存

是南

壽記也

西辰

芳遠

ふ二雄

下もも ちき ぬき ちき ちき ちき  
くちき ちき ちき ちき ちき ちき  
ちき ちき ちき ちき ちき ちき  
り ちき ちき ちき ちき ちき ちき  
ちき ちき ちき ちき ちき ちき  
お ちき ちき ちき ちき ちき ちき  
ちき ちき ちき ちき ちき ちき  
さ ちき ちき ちき ちき ちき ちき  
あ ちき ちき ちき ちき ちき ちき

竹亭

菊年

一草

文程

鳥峰

探花也

菊香也

芳樟

松風

青東風や	白浪の	く	去	着	糸	不	丈
白河の	川	と	あ	ら	か	松	江
十	五	車	と	竹	ひ	く	宋
油	と	さ	さ	汐	の	ひ	石
り	と	も	も	と	は	香	人
善	草	を	又	あ	ら	清	雅
川	汐	や	草	根	は	と	と
い	き	い	と	も	も	若	豆

18 months ago... 流

此山を以て教年とす

教正の安の二年を念と

よりりてとす

この山を以て教年とす

山

親しみは清氏翁の筆に  
 風情のまじりて  
 なるは世の  
 事なり

ほとけ

草の心

梅は清氏翁



東都

香のそよよそをわきまきりみの月	梅	松	萩	梅	松	萩	梅
そよよそよよけにほむ梅の心	梅	松	萩	梅	松	萩	梅
ひそよよ梅の心	梅	松	萩	梅	松	萩	梅
梅の心	梅	松	萩	梅	松	萩	梅
梅の心	梅	松	萩	梅	松	萩	梅

大板

東の山に雲ありては 柳の葉を風吹く  
 葉の影にけりや 梅の香を風吹く  
 春の風や 白雲を吹く  
 二つ三つと伸も出たり 月を照らす  
 よのよののさくらも 花を吹く  
 有るは 雲の影を吹く  
 名目や 柳の葉を吹く  
 梅の香や 花の影を吹く  
 さらさらや 柳の葉を吹く

友 英  
 南 歌  
 支 仙  
 冬 揚  
 君 石  
 波 路  
 梅 香  
 梅 香  
 冬 末

山を登りては 柳の葉を吹く  
 柳の葉を吹く 花の影を吹く  
 下へけり 柳の葉を吹く  
 さらさらや 柳の葉を吹く  
 柳の葉を吹く 花の影を吹く  
 梅の香や 花の影を吹く  
 さらさらや 柳の葉を吹く  
 柳の葉を吹く 花の影を吹く

果 然  
 耕 白  
 社 乐  
 柳 香  
 雲 香  
 梨 坤  
 春 柳

花のついで

其名をいふに

の  
印



花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで

まよひ 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで

万葉のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで

一輪のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで

あつよのついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで

ついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで

涼風のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで

白のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで

花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで 花のついで

善岳

凍雲

竹淮

可洗

可翠

臨法

棠枝

共彰

龍宮やふくまふれ一塔儀  
 石つるまふれ松を根よ一ちう水  
 三千三つノ龍ハりけきや清きうの風  
 言さくしあふの事やおしあふ  
 雲や遠のあつふらし一はくち草  
 志ろ丸むすくうありの磯の松  
 およそふや舞の庭にほあふり  
 さやあふりほをくもくも田植の句  
 春風や桐田中うせうありの泡  
右塔  
左塔  
小塔  
松  
芝  
草  
山

松と中風とまふれま柳一ふ  
 二道

けしきあやかしらひらくみまへ西ふま  
 壱つあふれまふれまふれまふれまふれ  
 力のあふれまふれまふれまふれまふれ  
 みるみるみるみるみるみるみるみるみる

素位  
松堂  
陸史

遠くあふれおろす清きあふれのあふれまふれ  
 本潤

結さるるまゝに世の中や 梅は客  
 眼さぬまゝに 柳を 望むるの  
 寺廻りきぬ一はや 娘のま  
 祝のいふ通のり下れぬはけし  
 山さや 福もあはれしもの  
 湖のいふるまゝに 雲の影の  
 海の  
 舟の  
 飛水

深きまゝに 都は 梅あり  
 雪のまゝに 湖のまゝに 舟あり  
 一まゝに 山さや 福もあはれしもの  
 昔し 舟のまゝに 湖のまゝに 舟あり  
 雪や 舟のまゝに 湖のまゝに 舟あり  
 舟のまゝに 湖のまゝに 舟あり  
 梅あり 舟のまゝに 湖のまゝに 舟あり

九 城 以 楯 草 園 竹 良 舟 担

甲斐 子守

定心くちまのきき 桂うね

飛鳥

あつりといふ一ふりよれぬ信ふ我

さぬふ

あまのりや 別なま場さるもれふ

夢柳

あまのりや 別なま場さるもれふ

水西

作重

あまのりや 別なま場さるもれふ

連水

あまのりや 別なま場さるもれふ

三友

春柳

あまのりや 別なま場さるもれふ

茶葉

むらみちたてしんまのち

清風あつるのちまをさる

あまのりや 別なま場さるもれふ

あまのりや 別なま場さるもれふ

あまのりや 別なま場さるもれふ

あまのりや 別なま場さるもれふ

なつりや 別なま場さるもれふ

茶五歌字山



春柳



古歌

烟をたふしむるのききもえりふ

武人

神もあやふしう業のふさしうせん

素直

大よかきしう 高き市のねりき

倭文

とくしうしんしんきしんきしん

角

梧原

おもしろいふしんきしんきしん

共呼

たれしとく山をふみしんきしん

夢海

むらけしひしんきしんきしん

海山

おのこしんきしんきしんきしん

薫甫

名にしんきしんきしんきしん

史遊

あきらめしんきしんきしんきしん

史遊

古歌

ききしんきしんきしんきしん

伯志

まじしんきしんきしんきしん

桂山

古歌

おのこしんきしんきしんきしん

系静

かれ屋をぬきしんきしんきしん

澄江

観山翁之十年答

君えん字之枯木

亦や何ぞ七十七  
旭言



*Faint bleed-through text from the reverse side.*

*Faint bleed-through text from the reverse side.*

*Faint bleed-through text from the reverse side.*

*Faint bleed-through text from the reverse side.*

*Faint bleed-through text from the reverse side.*

*Faint bleed-through text from the reverse side.*

*Faint bleed-through text from the reverse side.*

*Faint bleed-through text from the reverse side.*

小松

途叟

竹用

耕自

竹解

里桂

春鶴

梅翁

顔出—とみひるふ市の娘と夏  
空のあややひる—つとを律—の  
漸く—柳—の—けしき  
名の—生れ甲斐ありおの—  
—の—あ—の—  
月雲中—少—の—  
—の—  
—の—

名  
常素  
栗江  
栗揚  
可昇  
柳糸  
柳目  
洗玉

極々—とみひるふ市  
柳揚—の—  
湯のや—の—  
—の—  
—の—  
—の—  
—の—  
—の—  
—の—

名  
岳  
嶺  
湯  
魯  
魯  
魯  
魯  
希

以てあまふく句き梅ニ編く事  
句はなすしはひぬ事ありし時  
日はあまみ根すしをなめ梅はを  
遠曲はよくとくはくし梅中ふ枝  
句は口深き枝しる中ふ枝の風  
際ふりもあまの一月やさるはゆふ  
出しははのちのころは徳傳沙  
おもしろいおもしろいおもしろい  
人さしはすしおもしろい市は歌

芒家  
水湖  
龍湖  
庭句  
一枝  
吾風  
堆山  
月峯

かゝ陸の取はぬさぬうへに可なり

梅系

清くはあまの言明をふくかす

うつこ

梅はあまやあまのあまのあまのあま

歴山

あまのあまのあまのあまのあま

吟琴

梅はあまのあまのあまのあまのあま

晨露

牛一あまのあまのあまのあまのあま

望子

加賀

三平

三平

核活く 友々 吉吉のり とく 招

古古や 寿々とあふそ 本 幸々 木 查

おろきや 女々を友にまに 八

以ふ書や たん風のふち 海 舟

よひやといのや こと 口 是

皆うへきや ちふん 松 東

あはれ みたし りぬらう 松 日

推櫓のこもりの 舟 世

人の山 押しつけたり 舟 窮

舟々みくころ 持まぬ 月 梅

鞍とれハ 痛くもや 枕のそ風 受

春さよふ 春ぬとありぬ 居 中

水一岸 ちひとや 舟 立

*The first man of the world* 能 竹

まよふや ちふん 春 竹

あまの風 一本を 芝 石

ひと 能きまの 舟 三

あまの 舟 舟 生

可 宮 石 屋 中 東 日 江 窮 招 木 查

遊く日けききすや果りの空

誠書

鳥林

春の夜のさあやみ静かなる

誠中

春園

帆をたききかふるや舟布雲

枕石

ゆふゆふや舟よ流るる静かなる

異山

若里の春のたよりやわらわら

美松

苗代や水のたよりのはらば

友封

秋やと秋とふたつ流るる静かなる

鬼文

春の夜のさあやみ静かなる

栗井

はやねはり影よりうらむ静かなる

士峰

紫のたもたもよみ静かなる

木南

春の夜のさあやみ静かなる

晴雲

かきかきとあはれぬとあはれぬ

山家

すくすくや風うたがひ静かなる

文苞

まらまらと静かなる静かなる

梅子

冬牡丹うらやま静かなる静かなる

文破

妹のあやさわうーかゝぬ白の音  
十月やりわの中を海舟あそ  
ゆすゝあきさゝの葉や梅のま  
空月おとろけのうらみあうら  
奇麗なうらみおとろけのうらみ  
秋の香不ハ燈かろれは  
福藁や滑る思ひは汁は

伯耆

出雲

抱月  
若菜  
磯柳  
天江  
柳多  
強水  
曲川

以多かまきふ来市の晴るまの  
裏白や神代まゝの中さうた  
阪崎やまきふたをよの浦の雨  
露まきやまきふたをよの浦の雨  
かつあふは海舟といふあそび  
けしきのさうらうらぬきも月あそび  
今歌終るまきふたをよの浦の雨

指广

若作

一  
星雅  
壺月  
鏡总  
尾花  
秋琴  
尾川

は——  
志——  
白の——  
あ——  
顔糸の——

体

崔  
部  
峰  
記  
子

体中

桂  
洞

体

後——  
き——  
跡——

相  
照  
竹

体

元——  
あ——

善  
振

松——

松



名多や多葉とちふる相の影  
ちつ相重き以隣へ去りしゆ

石波

野 淮  
唯 園

弟やメカスレ学まつきりぬ

遠 翁

野水梅や枝様こしと寄れしは

葛 屋

花を更しし、訓よ。海きりし好

如 風

比戸さへふらふとてぬほくめは

古 酒

春の多 陽しふう人ありれちの

南 菖

旅人の在葉とむす 清きう字

茅 楮

以秋や言似松すれ 疎り赤

伊 祿

葉 畹

庭赤うやひし葉とほしも松とて

梅 庭

牛一吸ておろししゆのむすふ所哉

信 時

雲 海

山つけや 海よりやうりぬのまじ

才 疎

ほし葉と月の色や 雲うりぬ

水 漏

塩は赤くくはるるなり 雲の葉

花 信

楓 陰

きぬのちかきしるのほや 月りの白

知子

一

あつたのふれはるやふしきふ

孝子

晩

の梅のや 葉のうぶきはくしる

晩

あつたや 露のちかきふ

友村

後ひのちかきふは 梅のやうき

藤子

梅

生前の信交あつたかきふ  
信民居士廿三年暮

以てはつた魂

あつたはるの梅

弄月園



月 静  
 素 象  
 藤 村  
 不 争  
 池 菱  
 菟 白  
 龍 水

可 笑  
 世 曜  
 行 翠  
 静 如  
 友 山  
 南 山

蓬萊のふりくさふり福壽中

江二

村む崎のまはるる少宿系

無味

山 龍

あまのこころかきこころに初しこれ

北 左

まれんこころにやまのり

可 祝

川風をまきまきあり茂きあの

朴 斎

除乃やあまのまはるるむ女のり

一 松

涼少宿やこころにまはるる

如 堂

白園

雪や揚浪連ひつとかけはる

自 若

雪あふれゆきぬき男のり

若 水

光分はまはるるあり庭の梅

孤 形

霧ききあまのまはるる梅

醒 仙

江はまはるるあまのまはるる

梅 雅

一寸のこころにまはるる

珠 月

むしりや梅のまはるる

忠 孝

福ききあまのまはるる

世 石

雪ききあまのまはるる

半 堂



明治九年十月廿九日於觀山

法武堂神 三年祭典

徳意世傳之無り

法武堂神

人志のぬきし山家の月日

教子よりひく 祭 丁卯 冬

学をりふくまふ事や 自ら人

あまふりたりし心の上を

十六歳より人として

おとむのふり甘ふ事

頼は事やむかひ 水菓を

はらふとむかひ おの

ゆはりおの事やむかひ

はらふとむかひ おの

うらむとむかひ おの

おの事やむかひ おの

おの事やむかひ おの

おの事やむかひ おの

おの事やむかひ おの

湖 風

星 玉

藤 玉

晴 耕

魯 石

松 香

香 玉

世 糸

如 菜

曉 書

法 知

甘 雨

甘 雨

尚 書

中九千と團基の念ふは秋月  
 甲所車道のつらうふり心  
 弱きもよき春のあはれ  
 紺摺もよき春のあはれ  
 源のよき春のあはれ  
 茶さへみよき春のあはれ  
 けしきよき春のあはれ  
 張着花何れ出やうとよき春  
 茶さへみよき春のあはれ

藤玉  
 旧物  
 富名  
 為香  
 清知  
 甘雨  
 魯石  
 晴耕  
 尚香

おくやの風す極とて  
 畫了まよふか  
 小栗梅の竹を鞆  
 むら小園果を人の口  
 今もよき春のあはれ  
 衣柳まよふか  
 糸木鳥かり蹴され了  
 今もよき春のあはれ  
 少知のめり葉より

松香  
 如葉  
 星在  
 曉書  
 漸風  
 重書  
 旧物  
 魯石  
 世介

故を纏りし條の以てむれ  
玉串に初むさるるまじり海を  
手向のみをを籠りしとむ  
星 山 雅 子

故清氏翁の三子年表

權少教正

須田秀臣

多故人の言葉のよむおきけ  
何れもくみは美しきまじり

郷社々司

被主須田秀令

たむむや柳やまき葉の

祭辞あり暇に

祭事令

子や孫や幣とり阿ふまき葉  
曉 憲

故祖父翁の墓園をたふす城

招きよる三十年のまき葉をけりか

言ふまじりおとれおとれ男女老若中人皆

一に志城清り合て一糸足声姉妹



みぬく一日書きし一紙つよなりと

各主

雪菓りむのー 語りをほ 答 菓

法 知

露なつらさけを仰ふひと 結の

ひき子

かしらうー けしやまの葉

三十葉のりゆー さらば ちんちん

袋 指

そ菓のきー 入すきよ 五むり

漸 記

海山は 借物 清きと けむり

田 記

菓のむは 清きと けむり

甘 雨

あーらぬー むー 語りや 雪菓り

藤 玉

ゆーらや 袂にけしと けむり

粵 石

志たきー 支道ひと けむり

世 外

雪ほつらさけと けむり

松 露

月とささけと けむり

星 在

文の道 借るあやも けむり

晴 耕

伊みくさきと けむり

如 茶

梅さけひと けむり

雪 書

昭治三年一月廿九日 註 菅菴軒

法成寺神字年終結記云々

法成寺神

けつきや 初まや 辰の辰 五寸

かきあつう しまあ 白の葉

笛素たみ ちり 細とちり

かきれ ちり 赤法修 杖

月と ちり 辰の辰 二寸

ちり ちり 辰の辰 二寸

ちり ちり 辰の辰 二寸

杜山

潮風

末浦

四池

甘白

世系

ゆ着かきり 提子 瓢箪人

叫を ちり 他人の事 二風

ちり ちり 辰の辰 二寸

あれま ちり 辰の辰 二寸

山 ちり 辰の辰 二寸

会 釋 一 清 辰の辰 二寸

かけ ちり 辰の辰 二寸

け ちり 辰の辰 二寸

ちり ちり 辰の辰 二寸

楮丘

星在

晴耕

如茶

雪草

文祝

壽風

陸山

古書

一、まゝのまゝ傳山のむさしり  
身あつてあつてあつてあつて  
ハ重き重きあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
からあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

高重  
瑞風  
魯不  
有葉  
素昔  
相里  
松山  
石峰  
吉原

あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

理園  
祖海  
貞亮  
晋泉  
一睡  
萬在  
蒼仙  
三淮  
音隔

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

しづかに 出づるまゝに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

曉 雲

藤 玉

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに

佳 山

文 祝

米 南

弓 矢

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

あまのついでに ちかきとて 守るまゝに

楮 丘

古 苔

但 海

素 苜

吉 首

程 圃

素 風

相 里

隨 風

香花より白くくらの柳 うき  
香花より白くくらの柳 うき  
とりにに香花より白くくらの柳 うき  
三十歳のけしき 香花より白くくらの柳 うき  
月より白くくらの柳 うき  
あつ香花より白くくらの柳 うき  
雪より白くくらの柳 うき  
とりにに香花より白くくらの柳 うき  
とりにに香花より白くくらの柳 うき

貞亮  
松山  
晋泉  
一睡  
三淮  
蒼仙  
萬石  
石峰  
清興

立河清武宮神の伊勢子  
阿蘇のまき石二丁のまき石  
たりにに香花より白くくらの柳 うき



香花より白くくらの柳 うき  
たりにに香花より白くくらの柳 うき  
とりにに香花より白くくらの柳 うき  
とりにに香花より白くくらの柳 うき  
とりにに香花より白くくらの柳 うき

廿四日 何事もなしに静に

三年の祭典を以て可成りあり

その日 雨にはしあつて静かに

恩のたまふを仰ぎまことに静に

静かに静かに静かに

夕方の静かなる静かに

杜山



三河清氏翁之千手追善の巻末に

佳什挿入を覚へ海より評し

静かに静かに静かに

何日三年九月

杜山

本宅の静り静りの静り

静かに静かに静かに

静かに静かに静かに

静かに静かに静かに



97

